

ロールシャッハ・テストにおける動物・無生物運動 反応の解釈仮説の再検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文学部心理社会学科 公開日: 2013-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高瀬, 由嗣 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/15737

〔原 著〕

ロールシャッハ・テストにおける動物・無生物運動反応の 解釈仮説の再検討

高瀬 由嗣

要 約

本研究は動物および無生物運動反応について、文献に基づいてその解釈仮説を再検討するとともに、2つのロールシャッハ事例を通して新しい仮説を提案した。過去の文献を精査したところ、一般に被験者は動物の動きに同一化しにくく、そのため彼らは自らの意識的な価値体系から排除した原始的な衝動性を図版に投影していることが理解された。これを踏まえて、本研究は動物運動反応について以下のようなサブタイプがあることを提案した。すなわち、(a) 純粹形態反応に近い反応（第一のタイプ）、(b) 衝動を反映した反応（第二のタイプ）、(c) 人間運動反応に近い反応（第三のタイプ）の3種類である。一方、無生物運動反応の解釈仮説は、被験者が制御できないような力やエネルギーを認知している点に由来していることが確認された。これに基づき、本研究は無生物運動反応には幾つかのサブタイプがあることを示した。そして、無生物運動反応の解釈に際しては、その内容に着目し、認知された運動が人間の意志によってどの程度統制可能であるかを確かめるのが重要であることを指摘した。

キーワード：ロールシャッハ・テスト、動物運動反応（FM）、無生物運動反応（m）

I 問題と目的

ロールシャッハ・テスト（以下、ロ・テストと略）における解釈仮説の根拠は、この検査法の原理とでも言うべきものであり、これを理解するのにはテストの解釈技術を高めるうえでたいへん重要なことである。この考えに基づき、筆者はこれまでにロ・テストの分析・解釈上もっとも重要な変数のひとつである人間運動反応（以下、Mと略）の解釈仮説およびその内容分析の意義について検討した（高瀬、2010）。この小論ではそれに引き続き、動物運動反応と無生物運動反応を取り上げ

ることにする。

動物運動反応（以下、FMと略）と無生物運動反応¹（以下、m）は、国内外の主だったロールシャッハ体系の中にいずれも標準的に取り入れられた反応カテゴリーである。どの体系においても、おおむねFMは「衝動性」を、mは「精神的な緊張や葛藤」、あるいは「不安」を反映するものと意味づけられている。現在、多くのロールシャッハ使用者たちはこれらの解釈仮説に敢えて疑問を呈することもなく、日常の臨床実践の中に取り入れているように見受けられる。しかし、あらため

て考えてみると、これらの解釈仮説がいったい何を根拠として生成されたのか定かではない。Klopfer, Piotrowski, そしてExnerなど、それぞれの体系を構築した研究者の文献を熟読してみても、その解釈仮説の由来までは必ずしも十分に説明してはいないのである。

そこで本稿は、FMとmに焦点を当て、代表的な文献に基づいて解釈仮説の由来を再吟味するとともに、事例を通して新たな解釈仮説を提案することを目的とする。ロ・テストの長い研究史の中で、いま敢えてこのようなことを目的として掲げたのは、ロ・テストという道具を適切に使いこなすために、少なくとも代表的な決定因の解釈仮説の由来くらいは理解しておかなくてはならないと考えたからである。言うなれば、それはこの検査を実施する者としてなすべき務めなのである。

II 動物運動反応（FM）の解釈仮説

現在、FMは、国内外のどの体系においても「衝動性」を反映するという解釈仮説が示されている。この解釈仮説の根拠は何か、またロ・テストから読みとれる「衝動性」とはいかなるものか。

Rorschachのオリジナルの体系の中には動物による運動という概念は存在しなかった。たとえば「水中にもぐるアヒル」「蝶にかみつく犬」といった反応はすべて形態反応とされていた。Rorschach (1921) によれば、動物の動きは「絵

柄の形のみからする意味づけであり、運動を口にしても、それは単にことばのうえでの修飾、二次的な連合にすぎない」(Rorschach, 1921, 鈴木訳, 1998, p. 26) というのである。しかし、死の数週間前に行なわれたという講演において、Rorschachは動物の運動に対して「運動感覚的な決定因をもっているかもしれない形態反応（Mへの傾向をもったF）」(p. 235) という考え方をはじめて示した。

動物の運動にFMというスコアを最初に与えたのはKlopferである (Klopfer, Ainsworth, Klopfer, & Holt, 1952; Klopfer & Davidson, 1962)。彼は、この反応を「即座の解放・充足を求める衝動の認知」を表すものとみなした (Klopfer, Ainsworth, Klopfer, & Holt, 1952, p. 265)。この解釈仮説の強力な根拠となったのが、比較的低い知的水準にある人が、MよりもFMを多く与えるという事実であった。つまりFMは洞察や内省を欠いた反応であると考えられたのである。その後、PiotrowskiもFMを自らの体系の中に取り入れ、この反応が「統合の弱まった状態や、意識水準が低下したり自己統制が不完全な状態においてのみ外的な行動に影響を及ぼす被検者の原型的役割」(Piotrowski, 1957, p. 190) を表すという仮説を唱えた。この原型的役割の中には普段の行動には現れてこない本能的な衝動が含まれていることに注目するならば、Piotrowskiの仮説はKlopferのそれとほぼ同

1 従来、片口は“inanimate”を「無生物」と訳してきたが（たとえば片口, 1960）、1987年の『改訂新・心理診断法』より「非生物」という言葉に改めた。その理由について彼は、「無」より「非」の方が包括する領域が広く、抽象的な概念にmを与える際には「無生物」よりも「非生物」という言葉を用いる方が適していると説明する（片口, 1987, p.78）。しかし「広辞苑」をはじめとする国語辞典には「無生物」という言葉はあっても「非生物」はないことが示しているように、「非生物」は一般的な日本語ではない。また、今日における一般的な英和辞典においては、“inanimate”には「無生物の」という日本語が当てられることが多い（例えば研究社の新英和大辞典第6版, 2002）。さらに、抽象概念の運動を「無生物運動反応」と称することに何ら不自然さはない。したがって、ことばの普遍性という点に鑑みて、本研究では「無生物」という言葉に統一する。

じ意味をもっていると見なすことができる。さらに時代はくだり、Exner (1986, 2003) も、FMが即時的な満足を求める衝動と関係することに同意した。本邦における代表的な体系もだいたいこれと同様の解釈仮説を取り入れている（片口, 1987；高橋・北村, 1981）。このように、FMとは未分化な衝動性を表すという点で、諸家の見解はおおむね一致しているのである。

このような解釈仮説の背景には、Klopferも指摘するように、FMを与えるためには分化した知能や、M（人間運動反応）に見られるような高度に発達した共感能力をあまり必要としないという事実がある。実際、ロールシャッハ反応の現れ方を発達的に見てみると、FMは明らかに子どもに多い反応であることがわかる。たとえば、小川・松本の資料によれば、FMとMの比率は、小学校の低学年になればなるほどFM > Mの傾向が強く、高学年で両者が徐々に接近し始め、中学生になってようやくFMとMの数が並ぶようになることが確認できる（小川・松本, 2005, p. 62）。1970年に発表された小沢らの子どものデータもほぼこれと一致している（片口・小沢, 1970, p. 90）。しかし成人になると、FMとMの出現頻度が逆転し、全般にM優位となっていく（高瀬, 2006b, pp. 86-87）。これらのことからも明らかのように、FMはMに比べていくぶん未分化な性質をおびている。したがって、特に成人においてFMの数がMのそれを上回る場合、その人はより未分化で子どもっぽい特徴をもっており、衝動コントロールの面では、これを適切に制御するとい

うよりは、むしろ、衝動を即座に解放させ満足を得る可能性があると考えることができるのである。

しかし、これだけではFMが未分化な反応であることの理由にはなっても、Klopferが最初に唱えた「衝動の認知」という解釈仮説を直接に説明したことにはならない。彼がこの仮説を唱えた背景には何があるのか。

そもそもRorschachが動物の動きを運動反応としなかったのは、水中にもぐったり、蝶にかみついたりといった動物の動きを、被検者が追体験できない（言い換えると、被検者の内部に運動感覚が生起しにくい）点にあった（Rorschach, 1921, 鈴木訳, 1998, p. 26）。Rorschachによれば、運動感覚が問題となるのは、たいてい人間の姿が見られる場合のみであり、ほかでは、人間に似た動作をする動物みられる場合にときどき問題になるぐらいだという。Klopferは、このRorschachの考え方を忠実に受け継いだようである。すなわち、原始的でときに凶暴な性質をおびた動物の動きは、人間の動きとは異なり、わがことのように感じにくい性質をどうしても持っている。それゆえ、被検者が動物の動きに言及する場合には、彼／彼女は自らの意識から排除したものをそこに投影する可能性が高いとKlopferは考えたのであろう。ここでKlopferらの著書にあたってみると、FMは常にMとの対比の中で論じられており、Mが被検者の「(意識的な) 価値体系に統合」されたものであるのに対して、FMは被検者の「受容を欠いている」と記述されていることが確認できる²。つ

² Klopfer et al. (1952), pp. 265-266, およびpp. 288-291を参照のこと。ここでは、Mは“integration with the (conscious) value system”，すなわち、「(意識的な) 価値体系に統合」されているのに対し、FMは“impulses regarding which the person often lacks acceptance”，すなわち「被検者の受容をしばしば欠いた衝動」を表すとした記述が散見される。

まりMは被検者自身に受け入れられているが、FMは受け入れられにくい性質を持っているというのである。このことが上の推測の強力な裏づけとなろう。さて、意識的な価値体系の中に受け入れ難く、それゆえにそこから排除されたものとは何か。古典的な精神分析理論に従うならば、それは、人格の蒼古的な層に起源をもつものか、本能的な基礎をもつもの——衝動——ということになる。それが、動物の運動という形をとつておぼろげながらも被検者の意識にのぼるという意味で、「衝動の認知」という仮説が導き出されたのである。

III FM解釈仮説の再吟味と提案

前節では、FMの解釈仮説を理論的、そしてわずかながらではあるが経験的な観点から概観した。これによって、このFMが「衝動性」を反映するという仮説が与えられた根拠をある程度理解した。

しかしながら、すべてのFMを単純に衝動性に結びつけて良いものか疑問が残る。というのも、ひとくちにFMといってもその内容は多種多様であり、そのすべてに一律に同じ解釈仮説を適用するのには無理があるようと思われるからである。たとえば「2匹の小熊が仲良く遊んでいる」や「トラが足元を確認しながら慎重に岩場を渡っている」という反応に接したとき、果たしてこれは被検者にとって受け入れ難い衝動を表しているといえるのか。あるいは、もし、それが衝動の反映というのであるならば、それは一体どのような衝動なのか。

筆者には、これらの反応の中に被検者の「衝動」が表れているとは到底考えられない。むしろ、これらの反応は、被検者自身が意識しうる、彼／彼

女の姿をありありと映し出していると思われるのである。実は、この点についてSchachtel (2001) は、動物像の運動に対して被検者が同一化する場合も確実にあることを指摘している。彼に言わせれば、そのような反応において表現される欲求や態度は被検者によって全面的に気づかれているものか、もしくは容易に意識化されやすいものであるというのである。そうであるならば、そこから「意識的な価値体系から排除された」衝動を読み取ることはできないであろう。

この問題について、ロールシャッハ場面を離れ、動物像に対する同一化という観点からもう少し掘り下げてみたい。日常生活において、動物の行動を意味づけるとき、われわれは知らず知らずのうちに動物の中にわが身を移し入れていることをよく体験する。ときには動物の動きを実際に真似てみることすらある。つまり、われわれは動物に同一化することによってその行動の意味を理解しようと試みているのである。このことに加え、たとえば猫のような身近な愛玩動物から大海の白鯨に至るまで、人格化された動物像が登場する文学作品が古今東西数多く存在することは、われわれがいかに動物という対象に同一化しやすいかをよく表している。こうして見ると、上に示したような反応では被検者が動物像に同一化しているという推測がより確からしくなる。したがって、この反応は被検者の抑圧された願望や欲求を表しているというよりも、むしろM反応にきわめて近い意味を持っていると考えられるのである。

さて、これまでの議論から、FMという反応がすべて衝動を表しているわけではないということが徐々に明らかになってきた。筆者は、FMは大きく3つの種類に分けることができるのではないかと考えている。第一のタイプは純粋形態反応

(F) にもっとも近い意味合いを持ったものである。たとえば「蝶が羽を広げている」「蛾が壁にとまっている」「コウモリが飛んでいる」など、かなり頻繁に見られる反応がこれに該当する。これがRorschachの言うところの「絵柄の形のみからする意味づけ」であって、ここには被検者の動物像に対する同一化も見られなければ、衝動の内容が表れているわけでもない。すなわち、特別な意味を見出すことのできない反応である。第二のタイプが、Klopferが言うところの衝動の内容が反映されたFMである。たとえば通常はあまり出現しないような、過度に攻撃的・破壊的な運動のテーマが見られた場合、それは被検者の衝動の内容を反映しているかもしれない。あるいは、形態水準が極度に低下した反応の場合もこの第二のタイプである可能性が高い。というのは、形態水準の低下は、刺激をじっくりと吟味する力や良い答えを与えるべく自己を統制する力が低下していることを意味するからである。したがってその内容を吟味すれば、被検者が内奥に抱える衝動が読み取れるかもしれない。そして第三のタイプが、M反応にきわめて近い意味を包含するFMである。頻度としては決して高いとはいえないが、形態の質が良く、なおかつ被検者が動物像の動きに十分に同一化していると考えられる反応がこれに該当する。

発達的にみると、FMはM反応に比べていくぶん未分化な性質をもっている。さらに動物の動きは、すべてとは言えないまでも、人間の動きに比べてわがことのようにありありと感じにくい面が確かにある。したがって、そこに、被検者がふだん意識しないような衝動性が表れるという考えは大きいに首肯できるものである。しかしその一方で、必ずしもそういった意味を持たないFMも存在す

る。それゆえに、FMを分析する際には、その内容や形態水準など、質的側面を検討することがきわめて重要になってくる。これらの分析を通して、それぞれの反応が被検者の抑圧された欲求や態度を反映したものか、それとも意識の枠組みの中に比較的よく統合されたものなのか、あるいは取り立てて特別な意味を持たない反応なのかを明らかにできる。また仮に眼前の反応が、被検者の意識的な枠組みに統合され得ない何かを表していると考えられたとするならば、表明された内容を吟味することにより、被検者の衝動の内容に接近することができるであろう。ここに掲げたFMに関する新たな仮説は後に示す事例に基づいて検証をおこなう。

IV 無生物運動反応 (m) の解釈仮説

本節では、本研究のもう1つのテーマである無生物運動反応 (m) に光を当てる。まずはその解釈仮説の由来を考えたい。

mというカテゴリーも、FMと同様にロールシャッハの原法には存在せず、Klopfer, Piotrowskiの体系の中で初めて取り上げられた概念である。この2つの体系においてmは、個人が統制し得ない内的な力の認知を表すと考えられてきた。まず、Klopferは、mが「内的な葛藤や緊張の認知」と関係するとの見解を示した (Klopfer, et al., 1952; Klopfer & Davidson, 1962)。また、Piotrowski (1957) によれば、この反応は「好ましいと感じながらも実現し得ない原型的役割」を表すとされている。この解釈仮説は、一見するとKloperのものとはかけ離れているようにも見受けられる。しかし、mに託された役割 (たとえば「噴火」や「爆発」など) を被検者が「実現し得ない」がゆえに、被検者の内部に葛藤や緊張など

を生じさせているという説明に注目するならば、両者の解釈仮説があながち食い違っているともいえない。さらに時代はくだり、mはExnerの体系の中にも取り入れられ、それは心的ストレスや不安と関連を持つと考えられた (Viglione & Exner, 1983; McCowan, Fink, Galina & Johnson, 1992)。心的ストレスという言葉は、個人の内面に生じる緊張や葛藤と基本的に同義である。したがって、Exnerらの提示する解釈仮説も Klopferや Piotrowskiのものと大差はない。

諸家の間でこのような解釈仮説が定着した背景には何があるのだろうか。換言するならば、図版の中に無生物の動きを知覚することが内的な緊張、葛藤、不安の認知とどのように結びつくのであろうか。Klopfer, Piotrowskiのいずれもこの仮説の根拠について必ずしも明確には述べていない。それゆえ、まずはこの問題を取り上げる必要がある。

このことを考える前提として、ここ近年、インターネットの相談サイトに投稿された幾つかの相談事例に注目したい。以下に示すのは、「AllAbout」「goo」「yahoo」など、大手のインターネット企業が運営するQ & Aコーナーに実際に投稿された事例である。誤字、脱字等、明らかに誤りと思われる箇所は修正を行なったが、それ以外はできる限り原文のままを提示した。なお、参考までに投稿日およびURLを示した。

(事例1) 「振子に言いようの無い恐怖を感じます。取り下げられた電灯がゆれる、お寺の鐘がゆれる…。小規模(糸に下がった5円玉、置時計の振子)などは大丈夫なんんですけど。ある程度の大きさになり、おおきな振子運動にものすごい恐怖を感じます。治療できるのでしょうか?」(質問者: 男性・39歳、投稿日: 2007年8月6日、

URL: http://profile.allabout.co.jp/ask/qa_detail.php/5126)

(事例2) 「私の彼女は揺れる物が苦手です。しかし詳しいことは聞いても本人さえよく分かりません。「どういう風に嫌なの?」と聞いても「よく分かんないけど逃げたくなる。」とかです。分かっていることは苦手なものはブランコやシャンデリアなどが揺れていることで、試しに催眠術みたいに目の前で小さな吊つてあるものを揺らしてみても大丈夫なようでした。どうやら大きいもの(大小にきっちり線を引くことはできませんが)のみが苦手なようです。…(以下、略)」(質問者: 詳細不明、投稿日: 2005年3月15日、URL: <http://oshiete.goo.ne.jp/qa/1270585.html>)

(事例3) 実は私、大きな音と、揺れる物を、見ると怖くなるんです。いつも良く行くちゃんこ料理のお店に、大きなちゅうちんが、天井からぶら下げられているのですが、それにエアコンの、風が当たってゆるやかですが、揺れるんです、直径100cmくらいの、ちゅうちんのです……。そうすると食事していても、なんだか早く終わらせて、お店を、出たくなるんです。…(中略)…これも、一種の、何かの恐怖症でしょうか?」(質問者: 詳細不明、投稿日: 2007年6月18日、URL: http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1411929804)

ここに挙げた事例は、いずれも「ものが揺れる」という特定の場面に遭遇した際に、覚醒水準が上昇し、恐怖感が引き起こされ、その場から逃げ出したくなる気持ちに駆られている。これは明らかに恐怖症に特有の反応といえるものである (Clum & Febraro, 1998; Öhman, A, 2009)。したがって、仮にDSM-IV (American Psychiatric Association,

1994) に照らせば、上記はいずれも「特定の恐怖症 (specific phobia)」と診断される可能性が高い。ところで揺れるものに対する恐怖症的反応がきわめて稀なものかと問えば、必ずしもそうとはいえない。振子や波など一定の周期運動に対して恐怖や不安を感じるという相談事例は、日本語で運営されているサイトに限定しても、少なくとも10件以上は見受けられるのである。インターネット上のQ & Aコーナーに相談を持ち込むのは全体の中のごく一部であることを考えるならば、このようなタイプの恐怖症、あるいは潜在的にその傾向を持った人は、かなり多数にのぼると推測される。その意味で、上のような事例は決して特異なものとはいえない。

さて、この3つの事例を注意深く読んでみると、そこに共通する特徴があることに気づく。すなわち、同じ「揺れるもの」であっても、比較的小型のものが揺れる分にはさほどではないが、物体の質量が大きくなるほど恐怖が増すという現象である。この傾向は特に事例1と2に顕著に表れている。つまり、自らの力によって制御しえないような強いエネルギーを持った物理的な運動に遭遇して、相談者たちは度を失っているのである。言い換えるならば、それは、何か強大な力に呑み込まれて自己の主体性や自律性を失うことに対する恐怖なのであろう。たしかに上記の事例における恐怖反応は、一般の健康な人からみれば奇異にうつるかもしれない。しかし、自らの統制が到底及ばないような強い力に直面した際にわれわれに生じるであろう反応を想像してみると、上のような訴えそのものが決してわれわれの了解を超えるものではないことが改めてよく理解できる。そして、ここにおいて明らかなことは、無生物のある種の物理的運動は、人の主体的な意志によって制

御しにくい力として感知されることがあり、それが運動の知覚者に緊張と不安を引きおこさせていくという点である。

ここでロ・テストのmに舞い戻ろう。これまでにmの解釈仮説を問題とした文献の中には、重要な知見をもたらす研究が幾つか含まれている。中でも特に取り上げたいのは、Shalit (1965) が行った実験的な研究である。イスラエル海軍に籍を置く彼は、兵役義務につく20名の海軍男性兵士に対し、ルーチンの人物検査の一環として、まず通常の状況下でロ・テストを実施した。テストの実施は、Klopferの標準的な手続きに従った。最初のテストから12～18ヶ月後、この20名に対して再び同じ検査者が1回目と同様の手続きに従ってテストを実施した。ただし、2回目のテストは暴風雨のさなかの海上において激しく揺れる船舶の中で実施されたのである。暴風雨は船に対して常に12～22度の横揺れと、ときおり際立った縦揺れを引き起こした。また風速100ノット（約50メートル）の突風が数度にわたって30度の横揺れを生じさせた。当然、船室内においては揺れに備えて調度品は固定された。このきわめて過酷な状況下において、20名の兵士は不平をもらすことなくテストに協力したという。

この2回目のテストで得られた結果を分析したところ、Shalitは興味深い現象に気づいた。2回目においてm反応の数のみが総じて上昇しているのである。そこで総反応数 (R), M, FM, mの数を精査した結果、MとFMはほとんど変化がないのに対して、mに限ってはRの増減に関わりなく増加の傾向を示すことが見出された。また、その際のmの内容は、船、水、海などとは無関係であった。この結果をShalitは次のように考察した。当時、20名の兵士は近い将来に自分たちが配属され

る部署と待遇を決定するための試験の一環としてロ・テストが実施されているものと思っていた。言うなれば、目の前の検査者は自らの生殺与奪の権を握るものとして捉えられていた。それゆえ、テストを簡単に放棄できるような状況にはなかつた。これに加えて、暴風雨による高波にのまれ、被検者たちは不安や憤怒、あるいは無力感などがないまぜとなつた極度の緊張状態にあった。つまり、それが破壊的・崩壊的な力 (=m) となってテスト反応の中に現れたのであろう、というのである。

Shalitの研究は、統制群を用意していないという点では、必ずしも厳密な実験手続きを踏んでいるわけではない。しかしこの研究は、m反応と精神的な緊張、葛藤、あるいは不安との関係を初めて実証的に検討した点できわめて意義深い。Exner (2003) によれば、彼らの未公刊の研究の中には、落下傘部隊に所属する隊員に対して、初めての降下訓練の直前にロ・テストを実施したり(1974年)、心筋梗塞のリスクを抱えたまま退院を間近に控えた患者にロ・テストを行なつたり(1981年) したものがあるという。そして、このように被検者にある程度の心理的な緊張や不安をもたらす状況下で得られたテストにおいては、いずれもm反応の数の上昇が確認され、Shalitの見解は支持されたという。ここから次のように言うことができる。第一に、mという反応は、被検者の特性を表すというよりは、現在の心の状態を反映するものであること、第二に自らの置かれた状況を自らの力によってコントロールすることが困難な状況にあるもの——言い換えるならば、それによって著しい心的な緊張や葛藤、あるいは不安を体験しているもの——ほど、この反応を与えやすいということである。これは先の恐怖症の事例をもと

に考察したことにもつながつてくる。つまり、自らの力によって制御することの難しい、無生物の運動をロールシャッハ図版上に知覚するということは、被検者が何やら大きな力に呑み込まれそうになり、自らの主体性や自律性を維持することが困難になっていることを象徴的に表しているということである。

このように考えてくると、われわれの用いる日常語には、たとえば「堪忍袋の緒が切れる」「緊張の糸が切れる」「堰を切ったように(感情があふれ出る)」「(心の中の何かが)音を立てて崩れる」など、さまざまな精神現象を物理的な現象や運動に喩えられるのが多いことに気づく。つまり、自分の意志の力では如何ともしがたい心の中の状況を、われわれはこのようにして物理的な運動になぞらえてきたのであろう。このことも、ロールシャッハm反応が内的な緊張や葛藤を反映するという仮説と一脈通ずるものといってよいであろう。

V m解釈仮説の再吟味と提案

われわれはmが精神的な緊張や葛藤、不安と関係することをさまざまな事例や実験からみてきた。しかし、ひとくちにmといっても実に多様である。たとえば「飛行機が飛んでいる」「火山が噴火している」「蛙が踏み潰されている」「エネルギーどうしがぶつかっている」という反応は、Klopfer法や片口法においてはいずれもmとスコアされるが、その内容面に着目すると大きな違いがある。まず、「飛行機が飛んでいる」といった場合、飛行機を操縦するのは人間であるから、運動の理由が明白であるし、その動きを人為的に制御することも十分に可能である。しかし、これが「火山が噴火している」という自然現象になって

くると、その運動を人為的に統制することは難しくなってくる。まして「エネルギーどうしがぶつかっている」といった抽象的な運動の場合は、運動の意味や理由も説明がつかなければ、そこに人為的な力が介入する余地さえない。つまり、後の反応になるほど、被検者の認知の枠組みの中には統合され得ない力、それゆえに自らの力で統制することの困難な力が知覚されたことを意味する。また、運動エネルギーの源、すなわち何が運動を生じさせているかに注目するならば、たとえば「飛行機が飛んでいる」と「蛙が踏み潰されている」はまったく異質である。前者が無生物それ自体の運動であるのに対し、後者は生物に何らかの物理的な力が外部から加わって生じた運動を意味しているからである。これもまた、運動の統制の可能性という点からいえば、後者は外部からの力の作用による運動である分、制御することが難しい。これまで再三述べてきたように、mが精神的な緊張、葛藤、不安という要素を反映しているとするならば、運動の内容がどの程度統制可能なものなのか——視点を変えるならば、運動がどの程度被検者の意識の枠組みの中に統合されているか——を見きわめる必要が十分にある。それゆえ、mの研究においては、その質的な検討、すなわち内容分析がきわめて重要な意味をもってくるのである。従来の研究がmの内容面を軽視し、すべてを一括して同じ意味づけを行ない、その量だけを関心の対象としてきたことは問題であるといわざるを得ない。

ところで、従来の研究では、mはその頻度の少なさゆえか、MやFMの陰に隠れ、全面的に光が当たることが少なかった。この傾向は海外においても本邦においても同様である。これまでに Piotrowski (1957) が「主張 (assertive)」「服従

(compliant)」「不決断 (indecisive)」という観点から、また対象関係論をロ・テストの運動反応の分析に応用したUrist (1977; Urist & Shill, 1982) は知覚された事物の相互作用 (interaction) という観点からmの内容分析を一応試みてはいる。しかし、これらの研究はいずれもM、FM、mという3つの異なる運動反応に対して一律に分析を行ない、同一の解釈仮説を適用するという問題をはらんでいるばかりでなく、人間の運動の論考ばかりに多くが費やされ、mは付隨的にしか扱われていないという恨みもある。敢えていうまでもなく、無生物は自発的な運動の意志を持たないという点で、これに付隨する運動は、自発的な意志を持った生物の運動とは明らかに異質である。それゆえ、mは、MやFMとは切り離して分析すべき反応概念なのである。

このことを踏まえて、高瀬 (2001) は、mだけに焦点を絞り、実際の臨床群のデータにあたりながら、次のような反応カテゴリーを提案した。

- (1) 自然m (natural m)
- (2) 人工的m (artificial m)
- (3) 超自然m (supernatural m)
- (4) 受動的m (passive m)
- (5) 重力m (gravitational m)
- (6) 抽象的m (abstract m)

これらのカテゴリーについてまず簡単に説明する。自然mは、日常ごく普通に観察される無生物の自然な運動を意味する。たとえば「雲が流れている」「火山が噴火している」などがここに含まれる。人工的mには、「ロケットが上昇している」「飛行機が飛んでいる」など人間の自発的意志によって操作された、機械・物体・物質の運動が含まれる。超自然mは「火の玉が飛んでいる」「靈が浮遊している」など、超自然的な現象が認知さ

れた場合が含まれる。受動的mは、人間や動物などの生物、または物体・物質などに外部から力が作用し、運動が生じたものや、生物や無生物本来の形態が変化したものと定義される。つまり生物や無生物は自発的に運動しているのではなく、外からの不可抗力的な力によって動かされている、あるいは動かされたことを意味するものである。たとえば「上から踏み潰されて変形した生き物(あるいは物体)」「風におおられて宙を舞う生き物(物体)」などが該当する。重力mは「サルが落ちている」「ベンキがしたたり落ちている」など重力の作用によって生じた運動を表す。最後の抽象的mは、生物でもなく目に見える物体でもないもの、つまり抽象的な概念にともなう運動と定義される。たとえば「拮抗するエネルギー」「相対する力」などがここに含まれる。

さて、解釈にあたって重要なのは、表明された運動がどの程度統制可能な力であるかをみきわめることである。その際、上の6つの反応カテゴリーの中でも、特に注意しなければならないのが受動的mと抽象的mである。まず、外から不意に動かされるという運動が認知された受動的m（たとえば「踏みつぶされた蛙」）は、不意であるがゆえに、人為的な制御が困難であることを意味する。したがって、そこで見出された力やエネルギーは被検者の意識の中にあまり統合されていないといえる。一歩すすめでいうならば、それは主体的な意志の力による制御が困難である分、被検者の内部の緊張や葛藤がより強いことを表している。さらに、抽象的m（たとえば「拮抗するエネルギー」）にいたっては、不可視の抽象概念に付随する動きであり、それはもはや意志の力によって統制できるようなものではない。したがって、その精神的緊張は相當に高いと言わざるを得ない。この種の

反応は、統合失調症や境界性パーソナリティ障害といった、かなり病理の深い患者のプロトコルにごく稀に出現するものである。それゆえ、この抽象的mがたった1つでも認められた際は注意が必要となる。

一方、これらのmに対して、人工的m（たとえば「飛行機が飛んでいる」）は、人間の意志の力によつてもたらされた運動を表している。したがって、それは統制の可能な運動、換言すれば、被検者の意識の枠組みの中にもっともよく統合された運動であるといえる。その意味において、人工的mはもっとも健康度の高い反応であり、取り立てて問題視すべきものではない。

以上、mの解釈仮説の由来を背景にして、その解釈について新たな提案を行った。次節では、2つの短いロールシャッハ事例を取り上げ、FMおよびmの解釈について本研究が新たに提示した仮説を検討する。

VI 本研究が提案する解釈仮説の検証

事例1：FMとmに大きな特徴のみられたプロトコル（Aさん）

Aさんは、検査時31歳の女性。当時、病院精神科にて「気分障害」という診断を受けていた。高校を卒業するまで特に目立った問題はなかった。真面目な性格で、級友からの信頼もあつく、高校では学級委員長を務めるほどであった。しかし、その一方で自分の意見を主張できず、自分の中に封じ込めてしまうことがたびたびあった。高校卒業後は国立大学への進学を希望したが、それを望まない両親に何も言えず、結局、地元の短大に進学した。24歳で親の勧めに従って結婚。当初、Aさん自身は結婚に気乗りがしなかったが、両親に逆らえず、「今の時代ならバツいちも当たり前」

と自分に言い聞かせて、応じることにしたという。当然、結婚生活はうまくいかず、27歳で正式に離婚。その後、食欲不振、興味の喪失などうつ的な症状が表れ、精神科を受診した。

Table 1にはAさんのプロトコルからFMとmに

該当する反応だけを抽出して示した。なお、記号化に際して根拠とした反応語にアンダーラインを引いた。

(1) FMの解釈

IV図版第4反応の「恐竜」は、Klopferらが示

Table 1 FM and m Responses of Ms. A
Aさんの与えたFMとm反応

	自由反応段階	質疑段階	スコア
I 3	台風とかで屋根が飛ばされちゃった感じ。	何となく、普通な家っていうのは屋根がこうなってるけど、屋根の真ん中が吹き飛ばされちゃって、家自身もつぶれた感じ。雨漏りに絶えかねた家自身が、ぐしゃっとつぶれちゃった感じ。	Fm干 受動的m
IV 4	尻尾の長い恐竜がひっくり返って「起きられないよー」ってあがいでいる様子。	ここが足の裏…この薄いグレーのところが足の裏。うん、で、こっちが頭で…で、手が「助けてくれー」って何かバタバタしてる感じで、これがまた尻尾。自分の身体の重みで「尻尾が折れちゃったぞ」って。	FM± 第3のFM
V 1	火山の噴火	何か、ここが噴火してる感じ。ここが火口で噴火が始まったばかり。「いま噴火が始まったぞ」っていう感じ。…うーん…何かこの下にはまだ噴火を、これからする溶岩がたまってる状態。この空洞の中には見えないんだけど「まだまだたまってるぞ」という感じ。…今まで噴火したことないような山というような。「初噴火だぞ」というような。	mF干 自然m
VI 6	猫がネズミを捕まえて、口にネズミをくわえて、で、ネズミが逃げようともがいている。	この細いのが、細い2本あるのがネズミのヒゲっていう感じがして。こっちの大きいこの辺が漠然的に猫で。口でネズミの尻尾を捕まえている。尻尾をくわえちゃって、ネズミがもがいているという感じ。くもがいてる？>手をバタバタしてる。	FM干 第2のFM
VII 2	一つの餌に、これ何かな？豹か虎のような獰猛な動物が取り合いしている感じ。	これが豹に見えた。これが尻尾で、これが足で。2頭いて、餌は1つしかない。で、2頭で引っ張るから餌はもうちぎれそうになってる。…動物が取り合いするのは食べ物ぐらいしかないから、食べ物で。	FM± 第2のFM
VII 5	火山が噴火して、ふもとの村や町を飲み込んだ感じ。…ふもとで山火事が発生して、どんどん上まで広がってる様子。	これが山で、火山は噴火したんだけど、もう溶岩が下まで流れていっちゃってると…で、「実際はこの辺に街や村がこの辺にあったんだぞ」っていう感じで。で、下で火災が始まっちゃって、ていう感じ。で、この辺が火災まで発生しちゃって、この辺は火災までは至らなかったけど、「崩れていっちゃってるぞ」っていう感じ。	mF干 (付加決定因) 自然m受動的m
IX 1	地球が太陽に呑み込まれちゃった感じ。	この薄い線が、地球の形に見えた。これが何となくオレンジ色のところが太陽の炎に見えた。…これが太陽の炎で、これが地球で、本当に地球が太陽にバクッといかれちゃった感じ。	mF干 受動的m
IX 3	猪	これが、何か鼻っていう感じがした。<猪の顔？>うん。これ、よだれが垂れてる。何か本当に食べ物を探し求めてる感じ。	FM± 第2のFM
IX 4	闘牛で、牛が鼻息を荒くして、闘牛士の赤い布に突進していく感じ。	これは鼻息を荒くしてるという感じがした。…<突進してる？>鼻の穴が大きい。何か耳が立っちゃってる。	FM干 第2のFM

した典型的なFMとは明らかに異なり、被検者は図中の対象に深く同一化している。これが筆者の言う、第三のタイプのFMである。したがって、これは、意識的な価値体系の中から完全に排除した衝動性を表しているというよりは、むしろもう少し意識化しやすい、彼女の現在の状況を映し出したものと考えられる。その意味で、これはMにきわめて近い意味をもった反応といえよう。彼女は、この「恐竜」のように、何かにつまずき、自力で起きあがることが難しい状況に置かれているのであろう。そう考えるならば、これは彼女なりの「援助を求める訴え (cry for help)」とも解釈できるのである。

VI図版第6反応の「猫とネズミ」、VII図版第2反応の「豹」では、いずれも動物の捕食行動が見られている。いずれも凄まじい口唇攻撃性をテーマとしているが、捕えられた「ネズミ」が逃れようともがいているとしたVI図版の反応は特にその傾向が強く出ている。筆者は、これまで数多くのロールシャッハ記録を見てきたが、ここまで激しい攻撃性が示されたFM反応はあまり見たことがない。これこそが、先の論考で述べた第二のFM、つまり被検者の意識的な価値体系から排除された衝動性を反映した反応である。ところで、ここで強調しておきたいのは、捕食する側も捕食される側も、いずれもAさんの姿の一部を映し出しているという点である。つまり、彼女は対象に食らいつき、それを呑み込むような強い攻撃衝動を抱えつつも、普段はそれを封じ込め、あまり意識化されることもないのかもしれない。しかし、ふとした瞬間にそれが外在化され、あたかも他者から食われたり呑み込まれたりするような恐怖を抱くことも起こり得よう。このような視点から眺めてみると、彼女の人間関係はあたかも「食うか食われ

るか」という非常に殺伐としたものに感じられるのである。

IX図版第3反応の、よだれを垂らして食べ物を探す「猪」は特異な反応である。一般に、動物の捕食行動についてここまで詳細に言及した反応はあまりないからである。それゆえ、ここからはAさんの非常に原始的な口唇攻撃性が見て取れる。この反応も上記の2つの反応と同列に位置づけられるものと見てよかろう。続く、IX図版第4反応における、鼻息を荒くして突進する闘牛というのも、牛の攻撃性についてやや過剰な意味づけがなされている。その意味で、この反応にもAさんの独自性が表れている。これも上と同じく、普段彼女が人前ではあまり見せることはないであろう、未分化な攻撃衝動を反映しているようである。

(2) mの解釈

I図版第3反応「屋根が飛ばされちゃった…」は、被検者の反応語が受動態で示されているところから、文字通り受動mに分類される。「雨漏りに耐えかねた家自体が、ぐしゃっとぶれちゃった」という表現の中に、如何ともしがたい強大な力によって押しつぶされそうになっている状況が垣間見える。敢えて解釈するまでもなく、ここには非常に強い心理的な緊張が表れている。ところで、この強大な力とは何か。被検者の内部に存在する力か、あるいは外部からの圧力か。残念ながら、この反応からだけではその問い合わせまでは引き出せない。しかし、先のFMの解釈でも示したように、ときには自らの破壊衝動を外界に投影し、あたかも外部の力によって破壊されるように感じることもありうる。解釈に際しては、このことに十分に留意する必要があろう。

V図版第1反応は、何とも象徴的である。「今まで噴火したことのない山」が初めて噴火を開始

し、しかも地下のマグマだまりには、人には見えないけれども、次の大きな噴火を引き起こすマグマが待機しているのである。Aさんに潜在する破壊的なエネルギーが、まさに一触即発の状態にあるかのようである。

これがⅢ図版第5反応になると、大噴火が起こり、ふもとの村や町は溶岩に呑み込まれ、崩れしていく。いよいよ破壊的なエネルギーが姿を表すのである。この反応は、主として噴火について言及しているため自然mと分類される。しかし、Aさんの記録を仔細に読んでみると、後に、ふもとの村や町が消防を待っていると述べていることが確認できる。すなわち、彼女は、ふもとの村や町にも身を置いていたのである。その観点から捉えるならば、この反応は受動的mということもできる。これは、上にも述べたように、Aさんの攻撃的・破壊的なエネルギーの凄まじさを反映するとともに、Aさん自身はそれを受け止めきれずに外部に投影し、外側から破壊されるという感覚を抱きやすいことを表しているように思われる。

さて、IX図版第1反応では、ついに太陽の炎によって地球が呑み込まれてしまう。受動態で表現されたこの運動は、あまりにも強大な力に翻弄され、被検者自身の主体性や自律性が完全に奪い取られていることを表しているかのようである。最後に出現したmはこのようにあまりにも強烈である。しかしながらAさんの与えた結果を振り返ってみると、この最後の反応に限らず、一連のmにおいて知覚された強烈な力やエネルギーは、いずれも到底人間の意志によって統制できるようなものではないことが改めて確認できる。仮にこれらの力に遭遇したとしても、人間にはなす術もないのである。Aさんは、このように強大で爆発的な力が自分の内部に存在することをうっすらと感じ

ているのであろう。それは、おそらく先のFMの論考からも引き出された、非常に激しい攻撃衝動なのであろう。これまでの生育歴・問題歴をみてみると、彼女はこの攻撃衝動を抑えて生きてきたようである。しかし、それがここに来て、まさに一触即発の状態を迎えているのかもしれない。このことが彼女に多大な不安と緊張を与えていることが容易に想像できるのである。

事例2：健康度の高いプロトコル（Bさん）

Bさん（男性）は検査当時35歳。大学を卒業後、文学系の大学院に進学し、検査当時は大学に助手の職を得ていた。検査時までに精神科・神経科あるいは心療内科等への受診歴はまったくない。彼は、筆者の研究において、非患者群の被検者として協力を申し出てくれた1人である。検査に楽しそうに臨んでいた姿がたいへん印象的であった。

Table 2には、事例1と同様に、Bさんのロールシャッハ反応からFMとmだけを抽出して示した。

（1）FMの解釈

BさんのFMは、IX図版第3反応以外は、いずれも特別な意味を見いだしにくい反応である。X図版第6反応で述べられた「羽を広げているから飛んでいる感じ」という言葉がいみじくも示しているとおり、これはRorschachがいうところの「絵柄の形のみからする」運動の意味づけである（ダイナミックな動きがほとんどないVI図版第3反応、X図版第3反応も同様）。また、平凡反応であるⅡ図版第2反応、V図版第2反応、Ⅲ図版第1に伴う運動は健康な成人によくみられるテーマであり、ここにBさんの独自性が表れているわけではない。このように、インクプロットの形態にきわめて忠実に基づいた運動や、出現頻度の高い

Table 2 FM and m Responses of Mr. B
Bさんの与えたFMとm反応

	自由反応段階	質疑段階	スコア
II 2	熊か犬か何かが <u>じゃれあってる感じ</u> 。	頭…鼻をつきあわせて、 <u>じゃれあっている</u> 。熊と思ったのは黒いから。濃淡が毛皮っぽく思った。	FM± 第1のFM
II 4	電球…電球のカサがぶら下がっていて、赤い色がその下にある。…そんな感じ。	コードがあって、電燈の上方。形がそういう感じ。下の方(D2)に赤い色が <u>放射して</u> る感じからそう思った。	mF (付加決定因) 人工的m
III 1	黒人の女の人が2人…真ん中は太鼓か何かあって、それを打ち鳴らしている。両側の火は松明か何かで儀式的なものを盛り上げている。	黒人というのは黒いから。胸が出ていて細いから女性。太鼓があって、バチをもって叩いている。両側のすべての赤はかがり火。<そう思ったのは?>赤い色が関係。 <u>燃えている</u> 。儀式的な感じ。	mF± (付加決定因) 人工的m
V 2	蝶々ですね。	全体的。羽、触角、全体的に <u>羽を広げている</u> 。上方からみて <u>飛んで</u> る感じ。	FM± 第1のFM
VI 3	反対に見ると、ちょっとゴリラっぽい。…その横顔…お互い <u>背を向け合</u> っている。	目、口の部分が突き出ている。手、足。口が突き出ている感じがゴリラっぽい。濃淡の感じも。頭がでかくて、腕も太いからそう思った。	FM± (付加決定因) 第1のFM
VI 5		今、見えたのは潜水艦が浮上してきて、爆弾か何かがあって、危機を感じて、潜っていくところ。それが水面に映っている。<潜水艦?>形、潜望鏡、ブリッジ。<潜っていく?>下の方からだんだん水に潜ってくように見えた。	Fm± 人工的m
VII 1	動物が <u>よじ登ろう</u> とする感じかなー。	手、足、尻尾、頭…特にどんな動物ということはない。…猫にする。…よじ登ろうとするならば、ここは岩。	FM± 第1のFM
VII 3	反対にすると…ここら辺、頭で、歌舞伎の…派手な衣装を身に着けて役者が上からぶら下がっている感じ。	市川猿之助の舞台のラストシーンで、猿之助が舞台の上方に <u>吊り上げ</u> られていくところ。…頭、手、足…上半身と下半身の衣装の色が違う。着物の衿も見える。…ダバダバした輪郭と、色の合わせ具合から歌舞伎の衣装を連想。手も広がっているし、足も広がって <u>宙を舞</u> っている。いかにも舞台のラストシーンのよう。	Fm± (付加決定因) 人工的m
IX 3	ここが目ん玉…ちょっとひょうきんな…どんな動物かな…とほけた顔をした動物。	目…口を開けてる。…口の輪郭がモグモグした感じ。<モグモグ?>口を動かしているようなね。そんな感じがひょうきん。…目の中に瞳もある。犬か何かの顔。…現実的な犬。	FM± 第2のFM
X 3	ライオン	色は関係なくて、前足、後足、頭。 <u>ふんぞり返</u> っているポーズ。	FM± 第1のFM
X 6	それと鳥が <u>飛んで</u> いる	羽を広げているから <u>飛んで</u> いる感じ。特に何の鳥という感じではなく…。	FM± 第1のFM

運動のテーマについては、そこに被検者個人の特別な意味が付与されているとは言い難い。したがって、この種の反応から被検者の衝動性について云々することはできないのである。ここから読み取れるのは、せいぜい被検者が物事を常識的に捉えるだけの力を持っているということくらいである。

唯一、IX図版第3反応（「とほけた顔をした動物」）ではやや退行した、口唇愛情欲求を連想させる反応が与えられている。しかし、これも取り立てて問題視するような反応ではない。ひょうきんでとほけた顔の動物が口をモグモグさせているとしたこの反応は、どことなくユーモラスであり、少なくとも原始的な衝動性に駆り立てられるよう

にして出現したようには見えない。むしろ、この反応には被検者の遊び心すら感じさせる。これくらいの遊び心をもって一時的に退行できる人の方が、心が柔軟であり、健康度も高いといえるであろう。

(2) mの解釈

Bさんは付加決定因を含めて、全部で4つのmを与えた。数だけに注目すれば、それは先のAさんの事例と同じである。しかし、その内容を検討したところ、すべてが人工的mに該当することが確認された。電球から放射される光、松明、潜水艦の浮上と潜航、そして役者を吊り上げる舞台装置は、すべて人間の手によって操作され、管理される運動である。それゆえ、これらの運動は被検者の意識の枠組みの中によく統合されたものといえよう。もちろん、多少うがった見方をするならば、これら運動が人間の制御を超えて暴走する危険性がまったくないわけではない。しかし、たとえそうなったとしても、先の事例1で見たようなカタストロフを招来するものではない。その意味において、Bさんの心理的な緊張は決して問題視するような水準にはないといえよう。

VII まとめ

この小論は、ロ・テストのFMとmに焦点を当てて、従来の解釈仮説の由来を幾つかの重要な文献に基づいて検討した。これを踏まえて、筆者独自の新たな解釈仮説を示すとともに、実際の事例を材料として、その仮説の是非を検証した。

従来、FMは意識的な価値体系から排除された、原始的な衝動性を反映するとみなされてきた (Klopfer et. al, 1952; Piotrowski, 1957など)。また、その解釈仮説の根拠も文献を精読することにより理解することができた (Rorschach, 1921; Klopfer

et. al, 1952)。しかしながら、実際のプロトコルにあたって検討してみたところ、原始的な衝動性を反映するFMはごく一部であることが判明した。つまり、一般にあまり出現しないような、凄まじい攻撃性・破壊性が示された場合や、極度に退行した依存性などが示された場合にのみ、上記のような意味づけが可能になるのである。その最たるものは、やはり動物の捕食行動であろう。例えば「獰猛な動物が獲物を食いちぎっている」といった運動が表明されたとき、被検者自身はその運動を追体験できているといえるであろうか。おそらく、人間が2人で向かいあって荷物を持ち上げたり、太鼓を叩いたり、といったような場合とは異なり、画中の動物の動きをあたかも自分のことのようにありありと感じてはいないであろう。それゆえに、ここには被検者が意識的な価値体系から排除した、原始的な衝動が投映されているといえるのである。

しかしながら、FMの中にはKlopferらが考えたような衝動性を反映したもの以外にも幾つかの種類が見出された。その1つが、純粹形態反応反応(F)に限りなく近いもの(第一のタイプ)、もう1つがMに近いものである(第三のタイプ)。したがってFMを解釈する際には、その内容を吟味し、この中のどのタイプに属するかを判断したうえで慎重に行わなければならない。

一方、心理的な緊張、葛藤あるいは不安を反映するというmの解釈仮説は、被検者自身が自らの意志の力では如何ともしがたい力やエネルギーを認知しているという点に由来していることをわれわれは確認した(例えばKlopfer et. al, 1952, あるいはShalit, 1965)。しかし、mもFMと同様に幾つかのサブタイプが存在する。それゆえ、mの解釈に際しては、その内容に着目し、認知された

運動が人間の意志によってどの程度統制可能なものであるかを見きわめることが重要になってくる。たとえば、人智のまったく及ばないような強大な運動（筆者のカテゴリーでは受動的m、人為的に制御不能な一部の自然m、あるいは抽象的m）と、人間の意志の力によって制御可能な運動（人工的m）を見るのとでは、緊張、葛藤、不安の度合いがまったく異なるのである。われわれはこのことに常に留意しなければならない。

以上、FMとmに焦点を絞り、その解釈仮説を再検討したところ、幾つかの興味深い発見があった。2つの事例が雄弁に物語るように、同じ記号が与えられた反応であっても、その内容によって包含される意味は異なる。それゆえ、分析・解釈にあたっては内容に注目することが重要であり、その出現量だけに目を奪われてはならない。このことを最後に改めて強調しておきたい。

文献

- American Psychiatric Association (1994). *DSM-IV. Diagnostic and statistical manual of mental disorder*, (4th ed.). Washington DC: APA, American Psychiatric Press.
- Clum, A. G. & Febraro, G. R. (1998). Phobias. In: *Encyclopedia of mental health*: vol. 3, ed. Friedman, H. S. San Diego, CA: Academic Press. 157-169.
- Exner, J.E., Jr. (1986). *The Rorschach, A comprehensive system*, vol. 1: *Basic Foundations* (2nd ed.). New York: John Wiley.
- Exner, J. E., Jr. (2003). *The Rorschach; A comprehensive system: Vol. 1. Basic foundation and principles of interpretation* (4th ed.). New York: Wiley.
- 片口安史 (1960). ロールシャッハ・テスト 心理診断法詳説. 牧書店.
- 片口安史 (1987). 改訂 新・心理診断法. 金子書房.
- 片口安史監修・小沢牧子著 (1970). 子どものロールシャッハ反応. 日本文化科学社.
- Klopfer, B., Ainsworth, M., Klopfer, W., & Holt, R. (1952). *Development in the Rorschach technique: vol. 1. Technique and Theory*, New York: Harcourt, Brace & World, Inc.
- Klopfer, B. & Davidson, H. (1962). *The Rorschach technique - An introductory manual*, New York: Harcourt, Brace & World, Inc. (河合隼雄訳, 1964, ロールシャッハ・テクニック入門, ダイヤモンド社).
- McCowan, W., Fink, A. D., Galina, H., & Johnson, J. (1992). Effects of laboratory - induced controllable and uncontrollable stress on Rorschach variables m and Y. *Journal of Personality Assessment*, 59 (3), 564-573.
- Öhman, A. (2009). Phobia and human evolution, In: *Encyclopedia of neuroscience*: vol 7, ed. Squire, L. R. London: Academic Press. 633-638.
- 小川俊樹・松本真理子編著 (2005). 子どものロールシャッハ法. 金子書房.
- Piotrowski, Z.A. (1957). *Perceptanalysis: A foundation reworked, expanded and systematized Rorschach method*. New York: Macmillan.
- Rorschach, H. (1921). *Psychodiagnostik - Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungsdiagnostischen Experiments [Deutenlassen von Zufallsformen]* (9durchgeshene Aufl.). Switzerland: Hans Huber. (鈴木睦夫訳, 1998, 新・完訳 精神診断学——付 形態解釈実験の活用. 金子書房).

- Schachtel, E. G. (2001). *Experiential foundations of Rorschach's test*. Hillsdale, NJ: The Analytic Press.
- Shalit, B. (1965). Effects of environmental stimulation on the M, FM, and m responses in the Rorschach. *Journal of Projective Techniques and Personality Assessment*, 29 (2), 228-231.
- 高橋雅春・北村依子 (1981). ロールシャッハ診断法1・2. サイエンス社.
- 高瀬由嗣 (2001). ロールシャッハ非生物運動反応と精神病理. ロールシャッハ法研究 5, 1-12.
- 高瀬由嗣 (2006b). ロ・テスト記録のデータベース構築. 平成16～17年度科学研究費補助金(基盤研究(c)) 研究成果報告書.
- 高瀬由嗣 (2010). ロールシャッハ人間運動反応における内容分析の可能性と将来展望. 明治大学心理社会学研究5, 1-21.
- Urist, J. (1977). The Rorschach test and the assessment of object relations, *Journal of Personality Assessment*, 41(1), 3-9.
- Urist, J., & Shill, M. (1982). Validity of the Rorschach mutuality of autonomy scale, *Journal of Personality Assessment*, 46(5), 450-454.
- Viglione, D. J., & Exner, J. E. (1983). The effects of state anxiety and limited social-evaluative stress on the Rorschach. *Journal of Personality Assessment*, 47(2), 150-154.

Reexamination of the Interpretation Hypothesis of the Animal and the Inanimate Movement Responses in the Rorschach

Yuji TAKASE

ABSTRACT

The present study reexamined the interpretation hypotheses of the animal and the inanimate movement responses based on classic literatures, and proposed new hypotheses through two Rorschach cases. After investigating past literatures, it was understood that the testees were hard to identify with the movements of animals generally and they projected their primitive impulses which were excluded from their conscious value systems onto the cards. Upon this, the present study proposed some subtypes of animal movement responses as follows: (a) the responses that are near to a pure form responses (type 1), (b) the responses reflected impulses (type 2), and (c) the responses that are near to human movement responses (type 3). On the other hand, it was confirmed that the interpretation hypothesis of the inanimate movement responses (m) came originally from the fact that the testees recognized the power and/or the energy that they could not control. Based on this, the present study showed that there were some subtypes in m responses. On the interpretation of m responses, we point out that it is important to pay attention to their contents and identify the degree of control by will power in the recognized movements.

Keywords:

The Rorschach test, animal movement response (FM), inanimate movement response (m)